Title	P・T・フォーサイスにおける「エヴァンジェリカリズム」：「福音」、「恩寵」、「教会」を中心にして
Author(s)	高，萬松
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.42, 2008.8：202-222
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4012
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

P・T・フォーサイスにおける「エヴァンジェリカリズム」

――「福音」、「恩寵」、「教会」を中心にして

高　萬　松

はじめに

P・T・フォーサイス（1848-1921）の書いた書物と論文においては、「福音的」（evangelical）という形容詞が顕著に見られる。例えば、「福音的キリスト教」[1]、「福音的神学」、「福音的宗教」、「福音的土台」、「福音的信仰」、「福音的経験」、「福音的権威」などという言葉であり、それらがフォーサイスの神学において「エヴァンジェリカリズム」（以下、文脈において、〈evangelicalism〉は「福音主義」、〈evangelical〉は「福音主義的」あるいは「福音的」と記す）を形作っている。一方、第一次世界大戦後の一九一九年の論文においては、フォーサイスが「リベラル・エヴァンジェリカリズム」（liberal evangelicalism）[2]を擁護している傾向が見られるが、そうであるからといって彼が自由主義（Liberalism）に立っていたということを意味するのではない。このことは、フォーサイスの影響を強く受けており、『福音的キリスト教』において自らの立場を〈Liberal or Progressive Evangelicalism〉と規定している高倉徳太郎の場合にも同様に理解できる。[3]

フォーサイスの影響を受けている近年の欧米の研究者の書物においても、「福音主義」という言葉を見ることができる。ブローシュ（Donald G. Bloesch）の*Essentials of Evangelical Theology*（1979）という本は、フォーサイスの神学を福音主義と位置づけており、アングリカンの福音派の一人であるストット（John R. W. Stott）に献呈している。[4] 興味深いのは、ストットが*The Cross of Christ*（1986）においてフォーサイスの思想を重んじているということである。[5] そして、ベビングトン（D. W. Bebbington）は*Evangelicalism in Modern Britain*（1989）で、十字架の神学が福音に根ざしているということに注目し、デイル（R. W. Dale）をはじめ、デニー（James Denny）、フォーサイス、ストットの順に福音主義者をあげている。[6] 霊性に注目している書物においても同様である。ゴードン（James M. Gordon）は*Evangelical Spirituality*（1991）という著書で、フォーサイスの「祈り」における霊性が「十字架」に集中しているとし、ジョナサン・エドワーズ、ジョン・ウェスレー、ストットのような神学者たちと同じ福音主義者の隊列に並べているのである。[7]

本論文では、フォーサイスの言う「福音主義」の源流を探り、彼の立場が福音的自由教会の上に立っているということを究明したいと思う。

1　フォーサイスにおける「福音主義」の源流

①「福音的」という意味の概観

「福音的」という言葉は現今のドイツでは「プロテスタント」と殆ど同意語となっている。[8] 十八世紀から十九世紀の

イングランドとアメリカではエヴァンジェリカリズムがホワイトフィールドやウェスレーのような宗教的復興運動と関連づけられた。その時代には福音主義と言えば回心の経験から由来する、神への人格的な信頼に強調点が置かれた。今日、*Conservative evangelical* という言葉も聞かれるが、それは保守的神学を意味するだけではなく、政治的意味合いも強い。それはともかく、フォーサイスにとって「福音的原理」は「宗教改革原理」と同一視される。[9] 言い換えれば、〈evangel〉という言葉は、〈Gospel〉と同様に見ることができる。[10]

フォーサイスは福音主義の源泉を二つに考えている。一つは教会的（ecclesiastical）観点からみた源泉であり、もう一つは国家的（national）観点からみた源泉である。[11] 前者では、「新約聖書からの信仰と教会を再発見」すべきだということが主張されているため、宗教改革と関連がある。そして後者では、教会と国家間の問題から「教会における支配的な力としての信仰」の回復が主張されているため、彼の自由教会の源流であるピューリタン・インディペンデンシーと関連がある。以下、上記の二つの観点に注目して見たいと思う。

② 教会的観点：宗教改革

フォーサイスの本格的著作活動は一八九〇年代後半からである。そして宗教改革の精神が顕著にあらわれているのが一八九九年から一九〇〇年初頭に行われた講演と著作においてである。「福音的」という言葉は、彼の講演の主題にも用いられており、それは彼の神学的関心と見ることができよう。彼が属する教派である会衆派は日本にも影響を与えたので、その会衆派の歴史について簡単に見たい。

会衆派教会の源流は十七世紀のピューリタン・インディペンデンシー（独立派）である。その後裔たちは一八三三年になって、イングランド・ウェールズ会衆派教会における信仰と教会の職制に関する宣言文を発表した。彼らはロン

ドン宣教協会のように超教派的に活動し、超教会（inter-church）間で活動した産物としてEvangelical Allianceという同盟を結成した。その同盟の信仰条項は一八四六年にロンドンにおいて作られ、それが日本のプロテスタント教会にも伝えられた。高倉もそれについて言及している。[12] その後、会衆派同盟は国際的に広がり、フォーサイスが生きている間に三回の国際会議が開かれた。そのうち、第二回の会議は注目に値する。それは一八九九年九月にボストンで開かれ、二五〇〇名の代表が参加した会議である。その会議で、彼の*The Evangelical Principle of Authority*という題が示しているように、彼の立場は「福音的」であった。そこにおいて真実のエヴァンジェリカリズムとは、「教会の中での一派ではなく、教会そのものである。来るべき教会はエヴァンジェリカルな教会でなければならない」。[13] 無論、十字架とその福音を土台に述べられたのは言うまでもない。

前述のようにフォーサイスにおける宗教改革の精神は*Rome, Reform, and Reaction*（1899）という著作において顕著にあらわれている。注意すべきは、その著作ではルターの名前が多く出てくるが、それはルター個人を特定してはいないということである。それは宗教改革の象徴であり、宗教改革者の代表者として用いられている。[14] そのような意味で、彼が「われわれは福音的である」[15]と言った時に、福音的とは宗教改革者の立場であり、対カトリックの意味として理解してもよい。上記著作の中核とも言うべき箇所で、フォーサイスはカトリック教会を次のように批判している。

> 単なる理論ではなく実際的実践面において、教会を支配しなければならないものは次のとおりである。すなわち、それは、単なる使者や仲介者、代理者としての教会と共に、信仰を通して魂に迫ってくる福音としての神の御言葉である。その［教会の］場所と力から信仰を奪いなさい。そうすれば、教会は媒体でなく仲介者となり、その聖職者は司祭となり、その政策は奉仕でなく権力（power）となる。……真の権威は教会ではなく、十字架の説教において力のある神の御言葉である。[16]

③ 国家的観点：福音的自由教会

フォーサイスの「福音主義の源泉」においてもう一つ忘れてはならないものは、ピューリタン・インディペンデンシーである。それを考察するためには、まず教会と国家との関係を見なければならない。ピューリタンたちが国家教会（National Church）において信者であったときには、体としての教会は一つであった。その一つの教会の中には常に教会を改革しようとする勢力が存在していた。例えば、フォーサイズによれば、「エリザベス時代のピューリタンたちは真の究極的な宗教改革のチャンピオンであった」[17]。彼らもカトリック的要素から脱皮しようとしたという点において「福音的」であったであろう。一六六二年の「礼拝統一法」によって「非国教徒」がうまれると、ついにひとつの体としての教会は二つの体に分離される。国教会と自由教会という分離である。フォーサイスによれば当初、一六六二年に非国教徒の追放があった時に、非国教徒思想には自由教会的原理はなかった[18]。しかし、非国教徒が司祭を庇護した国家との関係を断つことによって、彼らは「福音的土台」（Evangelical base）[19]の上で「自由教会主義の基礎」を整えたのである。

次に、フォーサイスが教会と国家の関係を「独立」（independent）の関係と見ている点に注目してみたい。教会と国家の問題を巡るフォーサイスの見方は、一九一五年の著作、*Theology in Church and State*（1915）においても言及されている。そこでは「教会と国家間の絶対的分離と中立は不可能である。……中立はより不可能である」[20]と述べられている。さらに彼は教会と国家の離婚ではなく、結婚を想定している[21]。近藤勝彦教授の言うように、フォーサイスは異教と結婚した国家を知らなかったためにそのような見方は再考される必要があると思われるが[22]、ここではその関係の全貌を見る場所ではないので、福音的信仰の源流を探るということに絞って、*The Evangelical Basis of Free Churchism*（1902）

という題の論文に注目したい。

その論文の冒頭では「真の自由教会の問題は何か」と問われている。その問題とは、一九〇二年に政府によって制定された「教育法」と関連した問題であり、フォーサイスにとって実存的な問題であった。彼が福音的自由教会の問題を政治的に、社会的に解決しようとせず、事柄の原理とその標準を「新約聖書」[23]から得ようとしたことは高く評価できる。彼は教会と国家の関係において「分離」(separation)より「独立」(independent)という関係を好んでいる。あらゆる教会が「国家から独立すべき」(ought to be independent)[24]関係にあるとする。国家が宗教と結合すると、そこから弊害が起こるのは当然であろう。しかし、どんな教会も国家に無関心にはなれない[25]。なぜなら、教会は礼拝の権利や保有財産などにおいて国家からの保護を受ける必要があるからである。また、国家も教会に無関心になってはならない。というのも、国家には倫理と道徳的モチーフが必要だからである。誰が国家にその倫理的、道徳的モチーフを提示するかが問題であるが、フォーサイスは、諸宗教の中で教会こそがその役割を担うことができると認識していた。無論、そのような考え方にも問題がないわけではない。異教徒の国家や教会の力が弱い国家に対してはそのような考え方は制限があるであろう。すくなくとも、フォーサイスの当時の英国においては、教会が国家に「神の義」を提示し、道徳的基準をも提示する可能性はあったに違いない。しかし、国家が教会に助成金を支給したり、干渉したり、支配するということは認められない。また、国家が教会の牧師を国家の僕のように見なすということも同様である。そのような状況で、彼は教会と国家の「相互孤立の可能性」[26]を避け、教会と国家との分離という言葉を最善の用語として用いず[27]、教会は国家から「独立すべき」だと断言しているのである。すなわち、教会には国家に仕える巨大な国家的関心があり、それが「自由教会」の担うべきことだという自己認識であったのである。そうすることによって、教会と国家との間にある卓越性はより深められ、相補的に奉仕することができるのである。

実際、フォーサイスは国家の活動に無関心ではなかった。彼が上記論文を書いたころ、英国ではバルフォア(Balfour)

によって「教育法」(Education Bill) という法律が紹介された (1902. 3. 24)。その法の骨子は「特定の教派に属するどんな宗教的カテキズムや儀式をも教えてはいけない」[28]という内容であった。フォーサイスは非国教徒を代表して、その法律が取り消されるよう、断固として戦った。彼の言う教会と国家の独立とは、「それぞれが社会的連合における地位をよりよく確立し、それらの真の自由的結合を可能にする単なる手段」[29]なのである。自由教会は上述のような関係から派生された教会である。それゆえ、彼は次のように自己規定する。「われわれは福音主義自由教会員である」(We are evangelical Free Churchmen.)[30]、と。「自由と恵みの福音」[31]から動かされた人々によってつくられた自由教会には、神の「自由なる恩寵」が強調されている。それは、ピューリタン・インディペンデンシーからの影響による「福音的信仰」と見ることができよう。

2　福音主義の内容

フォーサイスにおける「回心」は彼の思想が自由主義から漸進的に遠ざかった契機になっている。その回心は一八九〇年代の後半にあったと見られている。そして、一八九九年に出版された彼の二冊の著作、*Christian Perfection* と *Rome, Reform, and Reaction* は彼の言う「福音主義」の内容を表している。後者において、彼は「福音主義自由教会 (Evangelical Free Church) が新約聖書のために、すなわち、恩寵と信仰という真のキリスト教的理念のために闘う」[32]、と言う。これは当時、彼の神学的闘いの路線と言っても過言ではない。

① 信仰

ヘッセリンク（J. Hesselink）によれば「聖書のみ、恩寵のみ、信仰のみという三つの句が単なるスローガン以上であるところに、福音的信仰（evangelical faith）は実際に現れれる[33]」。そうであるとすれば、フォーサイスが*Christian Perfection*（1899）という書で求めている「完全」という理念は福音的信仰の上に立っていると考えられる。というのは、そこにおける思惟構造が宗教改革の思想を基盤としているからである。彼によれば、「完全」には三つの観点がある。つまり、敬虔主義的観点、ローマ・カトリック的観点、プロテスタント的観点である[34]。第一に敬虔主義者は完全を、エクスタシーの傾向を持った静寂主義の罪のないことと考える。この宗教性は感情的・神秘的・自己反省的であり、彼らは完全を罪のない状態から求める。第二にカトリック的完全の理念は敬虔主義者と多くの共通点を持っているが、否定的な意味で世俗を超えている。完全について、フォーサイスは上記の二つの見方が「福音的」でないと言い、宗教改革者たちと同じように、聖書の原理と福音に飛び込むべきであるということを主張している[35]。すなわち、彼にとって真の完全とは、神に属する完全であって、「信仰」によるものであったのである。「完全なるということは、信仰によってキリスト・イエスに在るということである。それはキリストにおける神への正しい関係であって、キリスト教的品性の完全なる成就・達成ではない[36]」。「完全」という理念をめぐって信仰が強調されているということは、その完全が実際に何を意味するかということに帰結する。つまり、フォーサイスにとって、完全は神の義の所有であった。神の義は聖書が語っているように、わたしたちへの神の賜物であって、神の前においてわたしたちが獲得するものではない。

② 神の自由なる恩寵

フォーサイスの時代には恩寵という概念について大きく二つの見方があった。つまり、非人格的力として見るか、センティメンタルな愛として見るかである。彼はこの二つの傾向と闘った神学者である。前者がカトリックに、そして後者が当時の自由主義に多く見られた傾向であった。[37]

「恩寵に関するカトリックの見方はサクラメンタル的であり、プロテスタントの見方はエヴァンジェリカル的である」。[38] そのような見方は、カトリックでは恩寵というものが人間の魂に注入される（infused）ものと理解されているからである。つまりそれは、最初は洗礼によって、その後ミサによって注入される。それは「新しい義」ではなく、「古い義によって神を喜ぶ力」[39]と理解されうるであろう。では、福音的解釈はどうなるのか。フォーサイスは恩寵を「サクラメンタルな注入ではなく憐れみ（mercy）」として理解し、さらに、「福音としての恩寵、そして、キリストご自身としての福音」と理解している。[40] 一言で言えば、カトリシズムにとって恩寵は魔術的であるが、福音主義にとって恩寵は憐れみである。[41]

③「力」としての福音主義神学

高倉が「福音的信仰」をめぐって「教会はポジティヴな信仰、歴史的信仰の根底に立つところの宗教団体であらねばならぬ」[42]と言った時に、そこでの「ポジティヴな信仰」とは全くフォーサイスからの借用であるため、それを考察する必要がある。

フォーサイスにとって「ポジティヴ」（積極的）という言葉は「福音的」という言葉と互換可能である。[43]「自由主義神学」に反対するものとして「積極的神学」が提示されているように、「積極的」という言葉の意味は多様である。われわれはそれを「力」の概念として捉えて見たい。というのは、当時、「力」に対して、また「福音」に対して消極的であった神学への反発として、彼が「積極的神学」を言い表したからである。その根幹をなすのが神の側では愛となって働く「聖性」（holiness）であり、人間の側では「信仰」である。

第一に聖性に関して、それは贖罪の「力」と理解されている。聖性はフォーサイス神学において重要な神学的モチーフとして用いられているが、ここでは福音的キリスト教という観点で絞ってみたい。罪人である人間には「聖なる愛の啓示」[44]としての福音が必然である。愛は、破綻し、反抗的であった人間を神の満ち満ちた豊かで調和のとれた永遠の生命へと懸命に取り戻そうとする。それが愛の属性である。しかしそれだけではなく、恵み深い愛によって聖ならざるものの中に聖性を打ち立てようとする。それは恵みである。フォーサイスにとって神の愛は、恵みとしての聖性から発出した（outgoing）ものであり、愛は贖罪（redemption）の中に存在する。[45]聖性は、贖罪の恵みの中に現れるだけではなく、今まで人間のうちにあったサタンの王座に、贖うことによって自己を打ち立てる。そこに、神と人間との関係回復が起こる。したがって、彼は、聖性を贖罪の障害物ではなく、贖罪の源泉として、さらに贖罪の「推進力」（impulse）として見たのである。[46]

第二に信仰に関しては、それが生命をつくり、与え、形づくる「力」と理解されている。福音に積極性（positivity）があるとすれば、それは与えられたものの優位性であろう。[47]というのは、福音が人間から上がってくるのではなく、人間の上に押しかかってくるからである。それは、人間を救うものであって、人間が救わなければならないようなものではない。福音のキリストは人間のもとに遣わされたものであり、人間の罪のために与えられたものであったのである。与えられたものの優位性は結局のところキリストに頂点がある。フォーサイスによれば、真の有効な権威は、恵みとい

う神の永遠で永続的な行為と賜物との中にある。[48] 絶対的権威としての恵みに絶対服従することは信仰しかない。信仰は道徳的魂にとって権威のある力として働くのである。フォーサイスは言う。「キリストの十字架に示された聖にして恵み深い神を信じる人格的信仰こそ、道徳的魂にとって唯一の創造的で権威ある力であり、生命を造り、与え、形づくる力に他ならない」[49]、と。

3 「リベラル・エヴァンジェリカリズム」について

① 状況

一九一〇年代の英国の自由教会の状況は「教会の力の喪失」の時代であったと思われる。戦中（第一次世界大戦）、フォーサイスは*The Church and the Sacraments*（1917）という著書で、当時の自由教会とカトリック教会の危機の状況を次のように言う。「自由教会は真理と力の犠牲によって自由そのものを偶像化」し、カトリック教会は教会の公同性のために教会の聖性を犠牲にして福音の道徳的力を失い、その結果一致（unity）を偶像化する傾向を持った[50]、と。いずれも教会の力が喪失したような危機の状況と見られる。グラント（John W. Grant）は、一九一八年までにコングリゲーショナル教会は英国においてほとんど見捨てられたと見ている。[51] 実際の統計を見ると（一九一〇年）、一六個の指導的教団を含めた自由教会の信者は八、七八八、二八五人で、アングリカンの場合は七、二三六、四二三人である。[52] そして、コングリゲーショナル教会は一九一五年に二九一、一二八人であった。このような統計はコングリゲーショナル教会が全体自由教会の会員数に比べて相対的に劣勢であったということを示唆する。

そのような状況の中で、三つのグループが現れた。問題から避けようとする保守的人々、情熱的に政治改革に進んだ人々、そしてフォーサイスのように、彼らの考えに逆らい「信仰の歴史的観点を強調」[53]した人々である。最も重要なことは、グラントも正しく見ているように、フォーサイスがコングリゲーショナリズムの原理を「偉大なる教会」（the great Church）において保存しようとしたということである。[54] そのころ、教会の再統合（reunion）という問題は多くのコングリゲーショナリストたちにとって時代の話頭であった。[55]

②「リベラル・エヴァンジェリカリズム」

実際、フォーサイスは次のような委員会の一員でもあった。一次世界大戦以降、一九一八年と一九一九年にかけて、オクスフォードのマンスフィールド大学では、英国教会のメンバーと自由教会のメンバーたちが、教会の再統合という問題をめぐって委員会を開催した。そこにおいてフォーサイスは自由教会の一員として参加した（全部で六五名の牧師が参加）[56]。当時、彼は、*Unity and Theology: A Liberal Evangelicalism the True Catholicism*（1919）と題する論文で、福音主義が「リベラル」であるべきだということを言い表す。

彼は言う。「エヴァンジェリカリズムはリベラル的でなければならない。第一に、聖書の取り扱いと、聖霊の大きな賜物としての批評的方法を歓迎する面においてである。第二に、近代の哲学と文化を受け入れるという面においてである。第三に、キリスト教の倫理と、すべての社会倫理と国家の政治のための土台を作るエヴァンジェリカリズムでなければならない」[57]、と。

同様の言葉を高倉徳太郎も用いているが、彼がフォーサイスの影響を受けたことは彼自身の言葉から確認できる。高倉は言う。「私はフォーサイスの著書に沈潜した。近世において英米の神学界を通じて、彼ほど確信のあるインサイト

のみちた、福音的信仰にもえている神学者は他に見出すことは私にはできない。たしかに彼は偉大なる神学者である[58]」。そして高倉は既述の「ポジティヴな信仰[59]」をフォーサイスから見出し、次のような二点が啓発されたと明らかにしている。すなわち、福音主義の本質とプロテスタンティズムの教会の意義である。高倉によれば、当時（一九二四年）のプロテスタント教会には大きな二つの流れがあって、一つが十六世紀の宗教改革的要素であり、もう一つは十八世紀に起こった啓蒙思想と合理主義的要素である。高倉はこの両者を結合し融合する自分の立場を「進歩的なる福音主義」(Liberal or Progressive Evangelicalism)[60]と規定している。宇田進氏はこれについて、高倉の本音がよく表現されている言葉としてみている[61]。しかし、一九二三年にはAnglican Evangelical Groupによって*Liberal Evangelicalism*という題の書物が出ているように[62]、そのような用語はその時代的傾向の現れだと思われる。

「リベラル・エヴァンジェリカリズム」という言葉がフォーサイスにも、高倉にも同様に用いられている。高倉がその言葉をフォーサイスから引用しているかどうかは不明であるが、似ているということでその用法を同一視するのは無理がある。というのは、「リベラル」という言葉の扱い方に相違が見られるからである。フォーサイスが教会の再統合を目指して用いたならば、高倉は自分の思想的傾向性の表現として用いている。前者では、「偉大なる教会」を目指して、アングリカンと他の教会を含んだ教会の再統合の原理に用いられている反面、後者ではそのようなもくろみは見られない。フォーサイスにして「リベラル」という言葉が用いられることによって彼の「福音主義」が過小評価されてはならない。なぜなら、フォーサイスは自由主義者ではなく、福音を守り信仰について保守的な福音主義者であったからである[63]。

③「偉大なる教会」(great church)

フォーサイスにおける教会の連合あるいは再統合の問題を巡っては、彼の思想の前提となるものを見る必要がある。それは、彼の思惟構造の中にある「偉大なる教会」という理念である。「偉大なる教会」という言葉は、フォーサイスの一九一八年の講演において参照されているリンゼイ(T. M. Lindsay)の書物からも見られる。[64] リンゼイの*The Church and the Ministry in the Early Centuries*(1902)という本においては、〈great church〉という言葉がローマ帝国に置かれていた教会として、教会の組織(organization)の面として捉えられている。[65] しかしフォーサイスの場合は、それとは異なる。彼が〈great church〉という言葉を用いる時には、神の国における教会を歴史的に捉え、さらに世界に対する教会の「力」の概念として用いている。すなわち、彼にとって偉大なる教会は「一定の数の単独の教会の凝固(coagulation)によって構成されるのではなく」、[66]「聖なる神の聖なる行為によって創造される」。[67] すなわち、一方では、教会が連合して力で世界に対抗し、世界をキリスト教化し、[68] 他方では、「歴史的感覚」[69]をもって人類に対して責任と希望を与えるという目的を持った教会という意味がある。具体的には連立(federation)という方法によって偉大なる教会の形成を図ったと見てよいであろう。

結び

ヘッセリンクはカトリックという意味を次のように捉えている。「真のカトリックの教会はイエス・キリストの福音

をその豊かさや全体性において理解し提示するところである」[70]と。その上で、彼はカトリックとエヴァンジェリカルを相互依存的かつ相補的な意味で捉え、「われわれが本当にカトリックであるならばエヴァンジェリカルになるであろうし、本当にエヴァンジェリカルであるならばカトリックとなるであろう」[71]と言う。フォーサイスの神学は上記のような定義に合っていると思われる。すなわち、彼は宗教改革とピューリタン・インディペンデンシーに基づいて「エヴァンジェリカリズム」を確立し、また「偉大なる教会」を目指して教会のカトリシズムを実現しようとしたのである。

注

（1）P. T. Forsyth, *The Cruciality of the Cross*, Independent Press, 1908, 1955, 17（斉藤剛毅訳『十字架の決定性』ヨルダン社、一九八九年、二四頁）.

（2）P. T. Forsyth, '*Unity and Theology: A Liberal Evangelicalism the True Catholicism*,' In *Towards Reunion: Being Contributions to Mutual Understanding by Church of England and Free Church Writers*, Macmillian, 1919, 55.

（3）『高倉徳太郎全集　第二巻』新教出版社、一九六一年、六三頁。

（4）Cf. Donald G. Bloesch, *Essentials of Evangelical Theology: God, Authority, and Salvation*, Haper & Row, vol. 1, 1978, 4.

（5）Cf. John Stott, *The Cross of Christ*, IVP, 1986. 例えば、第八章 The Revelation of God において「神義論」が扱われる中では、フォーサイスの *The Justification of God* と題する著作から「十字架の神学」が重んじられている。

（6）D. W. Bebbington, *Evangelicalism in Modern Britain: A History from the 1730s to the 1980s*, Unwin Hyman, 1989, 14.

（7）James M. Gordon, *Evangelical Spirituality*, Wipf & Stock, 1991. 229-254.

（8）福音主義の歴史的起源については以下の書を参照せよ。Alister McGrath, *Evangelical & the Future of Christianity*, IVP, 1995,

chap. 1.

(9) フォーサイスは言う。〈How vast the Reformation principle is, the evangelical principle! It is the Gospel.〉 P. T. Forsyth, *Rome, Reform and Reaction*, Hodder and Stoughton, 1899, 20 (以下、Rome と略記).

(10) ヘッセリンクは〈evangel〉を〈gospel〉と同一視する。John Hesselink, 'Toward a Seminary that is Catholic, Evangelical and Reformed,' *Reformed Review*, XXVII, 1974, 107.

(11) Rome, 52-3.

(12) Cf. R. Tudur Jones, *Congregationalism in England 1662-1962*, Independent, 1962, 329-30. Alan P. F. Sell, *A Reformed, Evangelical, Catholic Theology: Contribution of the World Alliance of Reformed Churches, 1875-1982*, W. B. Eerdmans, 1991, 4. 高倉の言う「福音的キリスト教」はその同盟の一般原理を参考している。『著作集　第二巻』、五四頁。一般原理（General Principles）の原文は以下の通りである。1. The divine inspiration, authority, and sufficiency of the Holy Scriptures. 2. The right and duty of private judgment in the interpretation of the Holy Scriptures. 3. The unity of the Godhead, and the Trinity of persons therein. 4. The utter depravity of human nature, in consequence of the fall. 5. The incarnation of the Son of God, his work of atonement for sinners of mankind, and his mediatorial intercession and reign. 6. The justification of the sinner by faith alone. 7. The work of the Holy Spirit in the conversion and sanctification of the sinner. 8. The immortality of the soul, the resurrection of the body, the judgment of the world by our Lord Jesus Christ, with the eternal blessedness of the righteous, and the eternal punishment of the wicked. 9. The divine institution of the Christian ministry, and the obligation and perpetuity of the ordinances of baptism and the Lord's supper. Jaroslav Pelican (ed.), *Creeds & Confessions of Faith in the Christian Tradition*, Yale University Press, 2003, Vol. III, 259-60. cf. F. L. Cross (ed.), *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, Oxford University Press, 1978, 485, 536.

(13) Eugene C. Webster (ed.), *Volume of Proceedings of the Second International Congregational Council: held in Tremont Temple, Boston, Mass. September 20-29, 1899*, Press of Samuel Usher, 1900, 62.

(14) Rome, 118.

(15) Ibid., 69.

(16) Ibid., 135-6.
(17) Ibid., 59.
(18) Ibid., 53.
(19) Ibid., 54.
(20) P. T. Forsyth, *Theology in Church and State*, Hodder and Stoughton, 1915, 123.
(21) Ibid., 241.
(22) 近藤勝彦「P・T・フォーサイスにおける教会と国家」、倉松功・近藤勝彦編『福音の神学と文化の神学』教文館、一九九七年、一九五頁。
(23) P. T. Forsyth, 'The Evangelical Basis of Free Churchism,' *Contemporary Review* 81 (May 1902): 680 (以下、Churchism と略記).
(24) Churchism, 681.
(25) Ibid.
(26) Ibid.
(27) Ibid.
(28) Jones, op. cit., 338.
(29) Churchism, 682.
(30) Rome, 69.
(31) Ibid.
(32) Ibid., 64.
(33) Hesselink, op. cit., 107.
(34) P. T. Forsyth, *A Sense of the Holy*, Wipf & Stock, 1996, 73.
(35) Ibid., 76.
(36) Ibid., 77.
(37) Cf. John Rodgers, *The Theology of P. T. Forsyth*, Independent Press, 1965, 258.

(38) Rome, 56.
(39) Ibid.
(40) Ibid., 172.
(41) Ibid., 57.
(42)『高倉徳太郎著作集　第二巻』新教出版社、一九六三年、二三―二五頁。
(43)〈Positive means moral in the great evangelical sense.〉とフォーサイスは言う。P. T. Forsyth, *Positive Preaching and Modern Mind*, Hodder and Stoughton, 1907, 203（以下、Preachingと略記）（楠本史郎訳『フォーサイスの説教論』ヨルダン社、一九九七年、一九六頁）.
(44) Ibid., 213, 訳、二〇六頁。
(45) Ibid.
(46) Ibid.
(47) Ibid., 210f. 訳、二〇四頁。
(48) Ibid., 213. 訳、二〇七頁。
(49) Ibid（傍点筆者）.
(50) P. T. Forsyth, *The Church and the Sacraments*, Independent Press, 1952, xvi（以下、Sacramentsと略記）.
(51) John W. Grant, *Free Churchmanship in England 1870-1940: With special reference to Congregationalism*, Independent Press, n.d, 265.
(52) W. B. Selbie, *Nonconformity: Its Origin and Progress*, Williams & Norgate, n.d, 233.
(53) Grant, op. cit., 266
(54) Ibid., 267.
(55) Jones, op. cit., 363. 一九一九年には、自由教会の内部でFederal Council of Evangelical Free Churchesという会議も開かれた。Ibid.
(56) カンタベリ大主教に指名された副委員会と自由教会の代表者たちによる暫定レポートが一九一八年三月に採択された。A.

J. Carlyle (ed.), *Towards Reunion: Being Contributions to Mutual Understanding by Church of England and Free Church Writers*, Macmillan, 1919, 385-91.

(57) Ibid., 53.

(58)『高倉徳太郎著作集　第二巻』、二三頁。

(59) 前掲書、二三頁。

(60) 前掲書、六三頁、四六三頁。

(61) 宇田進『福音主義キリスト教とはなにか』いのちのことば社、一九八六年、一六三頁。

(62) *Liberal Evangelicalism: An Interpretation* By Members of the Church of England, Hodder and Stoughton, 1924. Cf. McGrath (ed.), *Modern Christian Thought*, Blackwell, 1993, 186.

(63) Gylym Griffith, *The Theology of P. T. Forsyth*, Lutterworth, 1948, 15.

(64) P. T. Forsyth, *Congregationalism and Reunion*, Independent Press, 1952, 73（以下、Congregationalismと略記).

(65) T. M. Lindsay, *The Church and the Ministry in the Early Centuries*, Hodder and Stoughton, 1902, 244. T. M. Lindsayが、日本にも知られているA.D.Lindsayの父であるという事実は興味深いことであろう。

(66) Sacraments, 68.

(67) Ibid., 60.

(68) Ibid., 125.

(69) Congregationalism, 55.

(70) Hesselink, op. cit., 104.

(71) Ibid.

参考文献

Donald G. Bloesch, *Essentials of Evangelical Theology: God, Authority, and Salvation*, Haper & Row, vol. 1. 1978.

Joel R. Beeke, *Puritan Evangelicalism: A Biblical Approach*, Reformation Heritage Books, 2007.

D. W. Bebbington, *Evangelicalism in Modern Britain: A History from the 1730s to the 1980s*, Unwin Hyman, 1989.

A. J. Carlyle (ed.), *Towards Reunion: Being Contributions to Mutual Understanding by Church of England and Free Church Writers*, Macmillan, 1919.

F. L. Cross (ed.), *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, Oxford University Press, 1978.

John W. Grant, *Free Churchmanship in England 1870-1940: With special reference to Congregationalism*, Independent Press. n.d.

Gylym Griffith, *The Theology of P. T. Forsyth*, Lutterworth, 1948.

R. Tudur Jones, *Congregationalism in England 1662-1962*, Independent Press, 1962.

Alister McGrath, *Evangelical & the Future of Christianity*, IVP, 1995.

Alister McGrath (ed.), *Modern Christian Thought*, Blackwell, 1993.

P. T. Forsyth, *The Church and the Sacraments*, Independent Press, 1917 1952.

P. T. Forsyth, *Congregationalism and Reunion*, Independent Press, 1952.

P. T. Forsyth, *The Cruciality of the Cross*, Independent Press, 1908.

P. T. Forsyth, 'The Evangelical Basis of Free Churchism,' *Contemporary Review* 81 (May 1902).

P. T. Forsyth, *Positive Preaching and Modern Mind*, Hodder and Stoughton, 1907.

P. T. Forsyth, *Rome, Reform and Reaction*, Hodder and Stoughton, 1899.

P. T. Forsyth, *A Sense of the Holy*, Wipf & Stock, 1996.

P. T. Forsyth, *Theology in Church and State*, Hodder and Stoughton, 1915.

P. T. Forsyth, '*Unity and Theology: A Liberal Evangelicalism the True Catholicism*,' In *Towards Reunion: Being Contributions to Mutual Understanding by Church of England and Free Church Writers*, Macmillian, 1919.
James M. Gordon, *Evangelical Spirituality*, Wipf & Stock, 1991.
D. G. Hart, *Deconstructing Evangelicalism*, Baker Academic, 2004.
John Hesselink, 'Toward a Seminary that is Catholic, Evangelical and Reformed,' *Reformed Review*, XXVII, 1974.
T. M. Lindsay, *The Church and the Ministry in the Early Centuries: The Eighteenth Series of the Cunningham Lectures By THOMAS M. LINDSAY, D. D., Principal of the Glasgow College of the United Free Church of Scotland*, Hodder and Stoughton, 1902.
Liberal Evangelicalism: An Interpretation By Members of the Church of England, Hodder and Stoughton, 1924.
Jaroslav Pelican (ed.), *Creeds & Confessions of Faith in the Christian Tradition*, Yale University Press, 2003, Vol. III.
John Rodgers, *The Theology of P. T. Forsyth*, Independent Press, 1965.
W. B. Selbie, *Nonconformity: Its Origin and Progress*, Williams & Norgate, n. d.
Alan P. F. Sell, *Nonconformist Theology in the Twentieth Century*, Paternoster Press, 2006.
Alan P. F. Sell, *A Reformed, Evangelical, Catholic Theology: Contribution of the World Alliance of Reformed Churches, 1875-1982*, W. B. Eerdmans, 1991.
John Stott, *The Cross of Christ*, IVP, 1986.
Eugene C. Webster (ed.), *Volume of Proceedings of the Second International Congregational Council: held in Tremont Temple, Boston, Mass. September 20-29, 1899*, Press of Samuel Usher, 1900.
宇田進『福音主義キリスト教とはなにか』いのちのことば社、一九八六年。
倉松功・近藤勝彦編『福音の神学と文化の神学』教文館、一九九七年。
高倉徳太郎『高倉徳太郎著作集　第二巻』新教出版社、一九六三年。

付記：本稿は日本基督教学会関東支部会（二〇〇八年三月一四日、於聖学院大学）で発表された原稿に加筆・修正を施したものである。